

『交隣須知』におけるh末音名詞

宮下, 尚子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494470>

出版情報 : 比較社会文化研究. 6, pp.9-17, 1999-10. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



『交隣須知』における h 末音名詞

宮 下 尚 子

0. 目次

1. はじめに
2. 『交隣須知』について
3. 『交隣須知』の成立時期と朝鮮語の時代区分
4. 京大版『交隣須知』の格語尾表記
5. h 末音をとる名詞
6. 後置詞と語尾, 中世語と近世語
7. 京大版『交隣須知』にあらわれる h 末音名詞
8. h 末音の痕跡
9. 結論
10. 参考文献
脚注
付録(1) ハングルの転写について
付録(2) 略語一覧

1. はじめに

中世朝鮮語の特徴の一つであるいわゆる h 末音名詞は、18世紀の朝鮮語学習書『交隣須知』においてもしばしば現れる。この h (ハングルの転写については付録(1)を参照のこと。特に指定しない場合は、ハングルの転写である。音声は[]で、音素は//に入れて表した)は、当時の正書法から見ると、格語尾であるいわゆる助詞の一部としてとらえられていた。h は常に名詞語幹から離して記述され、ときには h 末音をとりうる名詞においても h が全く現れないことからそれは判断される。また、名詞末音としての h あるいは h ではじまる格語尾の h を語幹名詞あるいは格語尾から分離すれば、現代語とほぼ同じような名詞と格語尾が残される。したがって、この名詞末音あるいは格語尾の初声 h については、名詞と格語尾の限界を区別するためにはさまれた強めのための介入音ではないとも言われていた。介入音である[h]は時代が下って語幹と語尾の区別の意識が発達して語形が定まるにしたがって脱落し、[h]のうちのあるものは軟口蓋音[ng]に変化したというのである。

本稿では、この h 末音名詞に関する現象について、『交

隣須知』例文中に現れるものを分析することで、h が介入音や助詞の一部ではなくて曲用⁽¹⁾の接辞であることを明らかにしたい。

2. 『交隣須知』について

『交隣須知』とは江戸時代から明治時代にかけて日本において用いられた朝鮮語学習書のひとつである。成立の年代や経緯については不明な点が多く、『交隣須知』の編纂当時の姿を知ることはできない。しかし、現在までに種々の『交隣須知』の写本が鹿児島県苗代川⁽²⁾をはじめ、長崎県対馬や韓国の釜山で発見されている。刊本としては明治14(1881)年浦瀬裕校正増補『交隣須知』(4巻)をはじめ、明治16(1883)年浦瀬裕校正増補『再刊交隣須知』(4巻)、寶迫繁勝剛正『交隣須知』4巻、明治37(1904)年前間恭作・藤波義貫共訂『校訂交隣須知』が知られており、18世紀以降明治時代までの200年にわたって『交隣須知』が広く用いられてきたことを知ることができる。

それらの写本および刊本を元に、『交隣須知』についてこれまで書誌学的な観点からの多くの研究が行われてきた。小倉(1936)は原『交隣須知』の編者については不問としながらも、当時までに発見された各写本と刊行された刊本の由来について論じている。一方で福島(1983)は『交隣須知』の編者を従来からの通説のように雨森芳洲⁽³⁾であるとした上で、明治14(1881)年、明治16(1883)年、明治37(1904)年の明治期の諸刊本についての成立の経緯や異同について述べている。また、新たに見いだされたアストン⁽⁴⁾旧蔵の『交隣須知』写本類について岸田(1998)がその内容を紹介し、苗代川系と増補系に分かれるとされる各異本との関係について考察⁽⁵⁾を行っている。これらの残された諸写本を見ることで、『交隣須知』と呼ばれる書物に共通したおおよその体裁を知ることができる。つまり、(1)全四巻で完結する、(2)各巻を通して「天文」「時節」「昼夜」「方位」などの70余の諸部門があり、その部門にしたがって3000近くの語彙が分類されている、(3)各張の表裏6行ずつ行頭に見出し語としての漢字が記され、その下に、

その漢字語あるいは漢字語に相当する朝鮮語を用いた文が示される、という一貫した諸体裁である。

本稿では、京都大学文学部所蔵の『交隣須知』（以下、「京大版『交隣須知』」とする）を底本として用いた。同書は鹿児島県日置郡苗代川に伝えられた朝鮮語学書の写本類の一つである。つまり、苗代川本と増補本という二系統の『交隣須知』の中で、苗代川系に属する写本である⁽⁶⁾。本書はまた『交隣須知』の明治刊本以前の姿を示す写本の中では、現在知られる限り唯一の完本である⁽⁷⁾。

3. 『交隣須知』の成立時期と朝鮮語の時代区分

朝鮮語史において、中世語と近世語は16世紀と17世紀の間にその境を持つ。これは資料的な時代区分によるものではなく、音韻、文法、および語彙の諸変化のために17世紀初めに朝鮮語が新しい様相を帯びるからである（李基文 1972: 84）。

京大版『交隣須知』は、形式的な一貫性とは相反して、その言語は極めて不安定な状態にある。既に濱田（1970: 109-132）でも指摘されているように、京大版『交隣須知』の朝鮮語には日本語からの干渉が原因であろうと考えられる錯誤がいくつか存在する。その他にも、見出し漢字語に対応する語形を抽出するという作業ができなかったために、一つの意味に相当する語が環境によって、あるいは編纂に用いられた資料の時期によって形を変えて現れるという中世語から近世語にかけて特有の問題が存在する。

18世紀の前半、つまり、近世朝鮮語の時代の初めから1世紀余りを過ぎた頃には既に成立していたと考えられる『交隣須知』⁽⁸⁾は、その資料的な年代的な区分からいえば近世朝鮮語としての特徴を持つはずである。これらの特徴は、中世語では存在した声調を示す声点の欠如、中世語でも既にその弁別機能を失っていたと言われる初声字、△ [z] や終声字 ◦ [ng] が用いられていないこと、16世紀から17世紀にかけて現れだした主格語尾-ga が頻繁に用いられていることなどにあらわれている。

一方で、語彙の面からは、「木」を示す名詞 namgi-do 「木も」（菌 / 蔬菜 / Vol. 2/25right）⁽⁹⁾、namonib-'wr 「木の葉を」（蚕 / 昆虫 / Vol. 2/18left）が異語幹屈折をし、「山」を意味する中世語 moi （現代語 san）の頻出など、中世語以前の様相を保っている。

これは『交隣須知』の特徴である外国語学習書という性格上やむをえないことなのかもしれない。創設以降朝鮮の解放まで、ハンゲルは「諺文 (enmun)」と呼ばれ、文献の諺解（注釈と翻訳）や訳官の外国語の学習書などの実用書に使われ、正式の国字となったのは朝鮮の解放後である。『交隣須知』は外国語学習書としての実用的な目的からハ

ンゲルで記述された。編纂に要した年月が長くなればなるほど、字形として固定され実際の音声とは食い違いが綴字が多岐にわたらざるを得なかったと考えられる。

4. 京大版『交隣須知』の格語尾表記⁽¹⁰⁾

上でも述べたように、京大版『交隣須知』において、主格語尾-i は語幹末音が子音で終わる名詞を支配し、主格語尾-ga は語幹末音が母音で終わる名詞を支配する。

(1)	<u>doQpuQ-'i</u>	bu-ni	<u>b@i-ga</u>
	東風. NOM	吹く. CONJ	船. NOM
	na'o-r	gas-i	bo-'wi
	来る. PTCP	事. NOM	見る. HP
	「東風が吹くので、舟が来るようだ」(東風 / 天文 / Vol. 1/2right)		

この基準に従えば、主格を表す形態素⁽¹¹⁾は異形態として /i/ と /ga/ を持つ。つまり、/i/ と /ga/ は互いに交替⁽¹²⁾の関係にあり、形態素の交替形として /i-ga/ を持つと言い換えることもできる。交替の条件としては、支配する名詞の末音が子音のときは /i/、母音で終わる語には /ga/ が付く。これらの交替形は音素的に条件づけられた自動交替とみなすことができる。

しかし、中世から近世にかけての朝鮮語では、現代語で慣習になっているような分かち書き⁽¹³⁾の習慣がなく、最小の有意義単位としての文節⁽¹⁴⁾の区切れは分けられていない。

京大版『交隣須知』を含め中世語から近世語の文献では、発音される言葉がそのまま表記される傾向があった。この理由として、当時はまだ文法に対する意識が未発達であったことがあげられる。音声の区切りは意味による分節⁽¹⁵⁾によって認められるもので、音声だけで単位を区切ることはできない。仮に意味の単位を当時の編者が認知していたとしても、語あるいは形態素としての意味の単位は音形と対応してはじめて実在する。意味のみから単位を設けることはできない。意味される概念は、一定の音形によって拘束されるはずである。名詞と格語尾、あるいは自由形式と拘束形式とを区別できずに、あるいは区別しようとしなかったために、名詞の末音としての終声は単位の一部としては認識されず、結果として単位の一部としてその他の単位とは分けて表記されることはなかった。そのために末音を含む名詞を文字として固定することができず、一つの意味に相当する語が様々な形を取って記述されることとなった。

この問題に対処するための第一段階として、文節の区切れや呼気段落⁽¹⁶⁾を明確にしようと、底本中の例文右側に

文節の区切れを示す読点が補助的に打たれることがあった。名詞と格語尾（または自由形式と拘束形式）の限界を分節しようとする試みについては、mwr-*i*「水が」（溶々 / 逍遙 / Vol. 4/47right), dor-*i*「石が」（石 / 地理 / Vol. 1/20right), bam-*i*「夜が」（螢 / 昆虫 / Vol. 2/20right) のように名詞の末音と助詞とを分析的に表記することで格語尾との区別を明らかにしようとした跡が伺える。

5. h末音をとる名詞

ところが、一部の格語尾では、語幹末音が母音であるにも関わらず、-hwn（提題）、-hi（主格）、-h@i（属格・処格）、-hwr（対格）、-hi-（指定詞の語幹）など、あたかも名詞末音と格語尾の間にhが介入したか、あるいはhで始まる格語尾のような表記がある。

- (2) sda-hi jw-da
地.NOM ぬかる.LP
「地面がぬかる」（地 / 地理 / Vol. 1/17right)
- (3) jigyeQ-'wn han-'wr
境界.NOM 限り.ACC
jyenh@-n sda-hi-ra
定める.PTCL 地.DECL.LP
「境は限りを定める地だ」（境 / 城路 / Vol. 2/44left)
- (4) nar-'i c@-myen sda-h@i
日.NOM 寒い.COND 地.LOC
'umur mus-go ja-'@bn@ni
穴 掘る.CONJ 寝る.HF
「日が寒ければ地面に穴掘って寝ます」（寤 / 地理 / Vol. 1/20left)

(2)から(4)はsda「地、地面」という名詞が末音hを伴って格変化する例である。このhに関する現象は、李朝初期の諸文献に散在する現象である（金敏洙1952：11）。どのような名詞がhを伴うかは諸研究の結果かなりの程度明らかになっている。金敏洙（1952：11）には51例⁽¹⁷⁾、李基文（1972：153）では、15世紀文献を調査した結果、80例が見つかったという⁽¹⁸⁾。崔範勲（1991：88-89）によると、15世紀の文献では106語⁽¹⁹⁾が整理されている。そしてこのhは15世紀の中期には脱落形が現れ出したという。『交隣須知』でも、末音hとその脱落形を同時に見ることができ。このhに関して、韓国語学では従来より(1)体言の終声であるh、(2)名詞と格語尾の限界を明確にするために、強めとして名詞と格語尾の間に介入したh、(3)hを語頭音

とする助詞、という大きく分けて三つの見解がある（崔範勲1991：88-91）。

朝鮮語の音節は、子音-母音-子音という3つの要素にわかれる。それぞれの要素は伝統的に初声（音節を開く子音）、中声（音節の核になる母音または半母音と母音）、終声（音節を閉じる子音）と呼ばれる。終声は次の音節の初声・中声と結びついて1音節を形成し、終声だけが独立の単位となることはない。そのため、音節末子音に関しては複雑な終声規則が存在する。

終声の中で、hの果たす機能は独特である。朝鮮語の終声hは、語頭では声門摩擦音[h]であるが、有声音間では弱まるか、または全く脱落する（梅田1992：954）。子音と隣接する場合についても、鼻音、流音以外の子音と/h/が連続する場合には、その2つが結合して激音と呼ばれる有気音を形成する。

また、崔範勲（1991：90）はh末音の起源と消滅について、アルタイ語族の祖語には多く含まれるといわれる/h/が平音という氣息を伴わない音に影響を及ぼして有気音（激音）を生ぜしめたが、有気音の確定後は、h末音は次第に消滅にむかったのではないかともいう。これは上述の/h/の特性、つまり隣接の平音を有気音化する一方で、母音間では脱落しがちという現代語の現象も含めての見解のようである。一方で李基文（1972）は、「体言の終声であるh」という立場からこのhに関する現象をh末音語幹と呼び、末音hあるいは助詞の初声hを中世語の曲用の際の名詞語幹であるとした。中世語ではh以外の名詞語幹末音をとる一部の名詞も曲用したという事実を敷衍して、この説明を受け入れるならば、例文(4)は(4')のように転写されるべきであろう。

- (4') sdah-i jw-da
地.NOM ぬかる.LP
「地面がぬかる」

6. 後置詞と語尾、中世語と近世語

ある形式が後置詞であるか語尾であるかは、種々の基準から区別される。正書法で離して書かれるかどうかは、歴史的・便宜的に処理される場合があるので、後置詞か語尾かを判断する基準とはならない。むしろ、後置詞と接辞・語尾の区別は明確には識別できず、区別が困難なことが多い。付属的な形式の中で、自立性の強い部類に属する後置詞と、自立性の弱い部分に属する語尾・接辞との間は連続的である。

例えば、語尾や接辞は交替形を持ちうるが、後置詞はそのような交替形を持たない点が基準としてよくあげられ

- n@s 「顔を」
(■ = 金 + 善 / 鋪陳 / Vol. 3/9left)
- n@sc-wr 「顔を」
(毛扇 / 雜器 / Vol. 3/19right)
- n@sc-@i 「顔に」
(皺 / 身部 / Vol. 1. 58right)
- (21) nib 「葉」
nib 「葉が」(落 / 品 / Vol. 2/39left)
nibp-i 「葉が」
(薪 / 樹木 / Vol. 2/35left)
nibh-i 「葉が」(著霜 / 天文 / Vol. 1/4r)
nibp-yoro 「葉で」
(香娘 / 昆虫 / Vol. 2/18right)
- (22) nyeb 「脇」
nyebh-wi 「脇に」
(挟 / 手運 / Vol. 4/2right)
- (23) sda 「地」
sdah-i 「地が」
(地 / 地理 / Vol. 1/17right)
sdah-@i 「地に」
(窖 / 地理 / Vol. 1/20left)
sdah-i-ra 「地だ」
(境 / 城路 / Vol. 2/44left)
sdaQ 「地」(筭 / 織器 / Vol. 3/12left)
sdaQ-i 「地が」
(■ = 水 + 田 / 農圃 / Vol. 2/28right)
sdaQ-'wi 「地に」
(蠹 / 昆虫 / Vol. 2/19right)
sdaQ-'wr 「地を」
(爪 / 走獸 / Vol. 2/10left)
sdaQh-@isye 「地から」
(銅 / 金寶 / Vol. 2/52left)
sdaQh-@i 「地に」
(巾 / 女飾 / Vol. 3/6left)
sd@Qh-i-ra 「地だ」
(邑 / 都邑 / Vol. 2/42left)
- (24) sdwr 「庭」
sdwrh-@i 「庭に」
(庭 / 宮宅 / Vol. 2/47left)
- (25) sei 「三」
seih-wr 「三を」
(丸盤 / 鋪陳 / Vol. 3/11right)
- (26) sim 「甚だ」
simh-i 「甚だ」(剛 / 人品 / Vol. 1/34left)
- (27) 'u 「上」
'uh-@i 「上に」(松魚 / 水族 / Vol. 2/15left)
'uh-oi 「上に」(滑 / 江湖 / Vol. 1/ 鶯 / 飛禽 / Vol. 2/1left)
'uh-wi 「上に」(上 / 方位 / Vol. 1/16right)
- (28) 'yenhyan 「宴」
'yenhyanh-i 「宴が」

- (明々後日 / 晝夜 / Vol. 1/13right)
- (29) 'yere 「諸々」
'yereh-i 「諸々が」
(姪 / 天倫 / Vol. 1/42right)
- (30) 'yo 「褥」
'yoh-wr 「褥を」
(褥 / 鋪陳 / Vol. 3/7right)

以上のほとんどは李基文 (1972), 金敏洙 (1952), 崔範勳 (1991) でとりあげられたものに含まれる。しかし, bimir 「秘密」, doQ 「盆」, jimba 「荷縄」, moida 「山地」などは上述の研究の記載には存在せず, 今回新たに京大版『交隣須知』の中で h 末音をとることが確認されたものである。

8. h 末音の痕跡

h 音をとる名詞はごく少数の限られたものであるにもかかわらず, そのふるまいは恣意的であり, 同一の名詞において同じ環境であっても, 規則的に現れるわけではない。中期朝鮮語の h 末音名詞は近代になっても前期にはその末音を維持したが, 後期にはそれが脱落したという (李基文 1972 : 208)。この末音の維持と脱落の間の揺れを示すもつとも興味深い例として, 「地, 土地」の相当語 sdaQ がある (§ 7. の㉓を参照)。sdaQ は中世語では sdah であった。h が語末で消失した h > ㄹ という変化の前段階として, 一部の名詞において h > Q という変化の過程があった。h から Q にわたる一連の変化は格語尾等の文法的な属性に依存するのではなく, 語彙的な状況に依存するので, 上述の h > Q という変化は sdah という限られた語彙にしか適用できない。

近世語および現代語において, sdaQ に後接する付属形式は, sdaQ の末音が子音 (Q) なので, それぞれ主格-i (8), 対格-'wr (9), 処格-'wi (10)であるが, 1例のみ, 処格で-h が介入する例 sdaQh-@i という例文(11)があった。

- (8) non-'wn sdaQ-i ge-n
畑. NOM 地. NOM 肥える. PTCP
hu-'ei 'ya dyohw-nira
後. LOC こそ 良い. DEC

「畑は地が肥えて後にこそ良いものである」(水田 / 農圃 / Vol. 2:28right)

- (9) dujjui sdaQ-'wr sdure-ni
もぐら. NOM 地. ACC 掘る. CONJ
skoaisimh-@-'wi
にくい. HP
「もぐらは地を掘るので憎らしいです」(■ (鼠 + 分) / 走獸 / Vol. 2:10right)

- (10) jom meg-n@n gos-wn sdaQ-'wi
虫 食う. PTCP 物. NOM 地. LOC
dodor-go bui-ro swr-e b@rye-ra
落とす. CONJ 箒. INST 掃く. CONJ 捨てる. IMP
「虫が食ったものは地に落としてほうきで掃いて捨
てる」(蠹/昆虫/Vol. 2:19right)

- (11) syugen-'wr sdaQh-@i
手ぬぐい. ACC 地. LOC
guQwr'i-ci-mar-go
引く. PTCP. 禁止. CONJ
m@rdog-'wi gerhye-ra
釘. LOC 掛ける. IMP. LP
「手拭を地に引きずらずに釘に掛けろ」(巾 / 女飾 /
Vol. 3/6left)

これは通時的に説明のつく現象である。つまり、『交隣須知』が行われていた当時、曲用語尾としての h は音的には既に機能しなくなっていたと考えられる。ただし、正書法が常に実際の発音に即して速やかに変化することはない。[h] の脱落后もしばらくは表記上は h が存在していた。しかし、もともとハングルは表音文字である。時代が下って文法に対する意識が発達するにしたがって、既に存在していない [h] そのものは次第に表記の上からも脱落をはじめたのではないだろうか。現代朝鮮語では語末音としての声門摩擦音[h]のほとんどは脱落して姿を消してしまっただが、軟口蓋鼻音[ng]に変化した例が多くの方言で散見されるという(李基文1972:257)。名詞 sdah は近世語になってその末音が ng へ変化し、また語頭の重子音 sd が濃音化して ddang という現代語の形態をとるに至った。しかし、常に語根には h が伴うという意識があったために、助詞の初声として書き言葉に h を残すことが稀にあったのではないか。この他に、中世語の b@rh 「尻」について、末音[h]が軟口蓋破裂音[g]に変化し、主格語尾の 'i をつけた形を無標とした例として、底本中では borgi 「尻」を確認することができる。これは底本中および現代語においては、主格形は borgi-ga となる。

9. 結論

以上、京大版『交隣須知』を底本として、その中に現れる h 末音名詞について概観した。その結果、底本中では30以上の名詞が h 末音を残した形で記録されていることが見出され、また、h 末音名詞の曲用の実際とその通時的な推移の一部を見ることができた。

h 末音を有する名詞は15世紀においても100を数えるほ

どであった。一部のそうした名詞が h 末音という特殊な語群を形成し、やがて消滅するに至ったかなどについては明らかにできなかった。ただ、h 末音を有した名詞がごく基本的な語であったこと、方言や現代語の一部に軟口蓋音に変化した痕跡が残ることなどから、周辺諸言語との接触や言語変化を考える際に極めて興味深い問題を提起している。

10. 参考文献

- 雨森芳洲著・関西大学東西学術研究所「日中文化交流の史的研究」歴史班編(1982)『芳洲外交関係資料書翰集』(雨森芳洲全集3「関西大学東西学術研究所資料集刊11-3」吹田市:関西大学東西学術研究所)
- 박종허 (1997)「중세국어 특수어간 교체의 음운론적 해석(A Phonological analysis on the special stem alternations in Middle Korean)」『국어국문학』119, 서울:국어국문학회, 1-29
- 崔範勳 (1991²)『中世韓國語文法論』서울:半島出版社(1981年初版, 二友出版社)
- 蔡琬 (1977)「現代國語特殊助詞의 研究」『國語研究』19, 서울:國語研究會(光明市:弘文閣, 1985年影印頒布)
- 최윤감 (1987)『중세조선어문법』연길:연변대학출판사
- 金敏洙 (1952)「호助詞研究 — 호末音 名詞와 助詞 —」『國語國文學』1, 서울:국어국어문학회, 11-14
- 高永根・成光秀・沈在箕・洪宗善編(1992)『國語學研究百年史 II』(意味論・國語史) 서울:潮閣
- 濱田敦 (1966)「薩摩苗代川に伝えられた交隣須知について」京都:京都大學國文學會, 21-55(京都大學文學部國語學國文學研究室編『交隣須知』解題所収)
- 濱田敦 (1970)『朝鮮資料による日本語研究』東京:岩波書店(1994年第3刷)
- 平凡社 (1972)『世界大百科事典』東京:平凡社(1975年版)
- 藤本幸夫 (1970)「(批評と紹介) 濱田敦著『朝鮮資料による日本語研究』」『朝鮮學報』56, 天理:朝鮮學會, 59-62
- 藤本幸夫 (1981)「(書評) 安田章著『朝鮮資料と中世國語』」『國語學』127, 國語學會, 21-26
- 藤本幸夫 (1997)「朝鮮書誌學の諸問題」『朝鮮學報』163, 朝鮮學會, 1-20
- 福島邦道 (1968)「『交隣須知』の増補本について」『国文学 言語と文芸』57, 東京教育大学国語国文学會, 1-8
- 福島邦道 (1969)「新出の隣語大方および交隣須知について」『国語国文』38-12, 京都大学国文学會, 41-52
- 福島邦道 (1970)「(書評) 濱田敦著『朝鮮資料による日本語研究』」『国語學』83, 國語學會, 71-77
- 福島邦道 (1981)「(書評) 安田章著『朝鮮資料と中世國語』」『国語と国文学』58-5, 東京大学国語国文学會, 119-122
- 福島邦道 (1983)「『交隣須知』の初刊本」『実践国文学』24, 実践国文学會, 22-38
- 福島邦道 (1991)「雨森芳洲と『交隣須知』」『実践国文学』39, 実践国文学會, 135-141
- 福島邦道・岡上登喜男編著 (1990)『明治14年版交隣須知本文及び総索引:本文篇』(笠間索引叢書95) 笠間書院
- 福島邦道・岡上登喜男編著 (1990)『明治14年版交隣須知本文及び総索引:索引篇』(笠間索引叢書96) 笠間書院
- 李康民 (1993)「対馬宗家文庫所蔵の『物名』について」『朝鮮學報』148, 天理:朝鮮學會, 147-182
- 李基文 (1972)『改訂國語史概説』서울:塔出版社(日本語訳:藤本幸夫訳『韓國語の歴史』東京:大修館書店, 1975)

- 李崇寧 (1972) 『國語學研究』大邱：瑩雪出版社
- 李崇寧 (1990) 『中世國語文法 — 15世紀를主로하여 —』(大學叢書 1) 서울：乙酉文化社 (1960初版, 1981改訂初版, 1990改訂9版)
- 李元植 (1984) 「朝鮮通信使に随行した倭学訳官について — 捷解新語の成立時期に関する確証を中心に —」『朝鮮学報』111, 天理：朝鮮学会, 53-117
- 泉澄 (1997) 『対馬藩儒雨森芳洲の基礎的研究』(関西大学東西学術研究所研究叢刊10) 吹田市：関西大学東西学術研究所
- 田光鉉 (1967) 「十七世紀國語의 研究 — 특히 表記・音韻・形態의 問題點에 대하여 —」『國語研究』19, 서울：國語研究會 (光明市：弘文閣, 1985年影印頒布)
- 鄭光 (1999) 「訳学書研究の諸問題 — 朝鮮司訳院の倭学書を中心として —」『朝鮮学報』170, 天理：朝鮮学会, 29-66
- 亀井孝・河野六郎・千野栄 (編著) (1996) 『言語学大辞典第6巻 術語編』東京：三省堂
- 岸田文隆 (1998) 「アストン旧蔵の『交隣須知』関係資料について」『朝鮮学報』167, 天理：朝鮮学会, 1-39
- 岸田文隆 (1997) 「『漂民対話』のアストン文庫本について」『朝鮮学報』164, 天理：朝鮮学会, 1-39
- 河野六郎 (1969) 「朝鮮語」『河野六郎著作集1』東京：平凡社, 3-78
- 河野六郎 (1969) 「朝鮮語の系統と歴史」『河野六郎著作集1』東京：平凡社, 79-85
- 南廣祐 (1984) 『補訂古語辭典』(1960年初版, 1984年補訂重版), 서울：一潮閣
- 小倉進平 (1966) 「『交隣須知』に就いて」(京都大學文学部國語學國文學研究室編 (1966) 『交隣須知』解題所収, 『国語と国文学』(1936) 13-6初出), 京都：京都大學國文學会
- 小倉進平 (1964) 『増訂補注 朝鮮語学史』東京：刀江書院
- 齊藤明美 (1995) 「交隣須知の研究 — ソウル大学本と濟州本の巻二を中心に —」『論輯』23, 駒澤大学大学院国文学会, 111-131
- 齊藤明美 (1996) 「交隣須知の研究 — ソウル大学本と東京大学旧南葵文庫蔵本の巻四について —」『論輯』24, 駒澤大学大学院国文学会, 109-128
- 志部昭平 (1990) 『諺解三綱行実圖研究 (全2冊)』東京：汲古書院
- 辻星児 (1997) 『朝鮮語史における捷解新語』(岡山大学文学部研究叢書16) 岡山市：岡山大学文学部
- Umeda, Hiroyuki (1957) "The Phonemic System of Modern Korean," 『言語研究』32, 東京：日本言語学会, 60-82
- 梅田博之 (1992) 「朝鮮語」『言語学大辞典』第2巻, 東京：三省堂, 950-980
- 梅田博之 (1993) 「延辺朝鮮属の音韻」『言語文化接触に関する研究』6, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 131-145
- 安田章 (1966) 「苗代川の朝鮮語写本類について — 朝鮮資料との関連を中心に —」『朝鮮学報』39・40, 天理：朝鮮学会, 210-237
- 劉昌惇 (1964) 『李朝語辭典』서울：延世大學校出版部 (1997年12版)

注

- (1) 曲用 (declension) という術語は、本来インド・ヨーロッパ語の名詞における格変化の形態を示す術語である。用言は活用し、体言は曲用する。現代朝鮮語では格変化の際に名詞の語幹は変化しない (ただし、語幹末音が母音で終わるか子音で終わるかによって、膠着する格語尾の形態が異なる) ので、曲用は名詞と助詞の統語的關係で表される。ところが500年前の中期朝鮮語では、一部の名詞の曲用の際に異語幹屈折 heteroclitica) が見られた。namo 「木」を示す名詞の独立形は namo であったが、この語に助詞が加わると、namg-en (木

は), namg-i (木が), namg-er (木を) などと, namo とは別の語幹 namg-が用いられた。

- (2) なえしろがわ：現在鹿児島県日置郡東市来町美山。壬申倭乱により多くの朝鮮人捕虜が日本各地に連行された。その中の一つが苗代川である。慶長19年、島津家久は陶工朴平意に細工所を与え白焼物を作成させ、庄屋役を任命した。以来陶磁器の製法がこの地に伝来されてきた。多くは日本の風土や民族に同化融和して次第に朝鮮の姓氏を捨てて日本人と一体になった。しかし、苗代川では藩主の特別な保護政策の下に朝鮮の旧風を保存し明治維新に及んだ。日本名の使用は許されず、他村の者が結婚により当村に居住することは許されたが、当村の者が他村へ出ること許されなかった。こうした徹底した隔離ともいえる保護政策は薩摩の焼き物を他藩に漏らさず温存を図るためであったと言われる。苗代川村は、明治22年から昭和31年まで下伊集院村の大字となる。昭和31年以降日置郡東市来町美山となる。(平凡社 (1998) 『鹿児島県の地名』(日本歴史地名体系47), 東京：平凡社, 340-341)
- (3) 雨森芳洲については泉(1997:585-586)に略年譜がある。1668 (寛文8) 年の生まれ。1689年 (22歳) に対馬藩に仕え、木下順庵の元で学ぶ。1703年 (36歳) から1704年 (37歳) にかけて、1705年 (38歳) 4月から11月にかけての2度にわたり朝鮮に留学する。1755年 (88歳) 没。
- (4) Aston, William George (1841-1911)。イギリスの外交官。アイルランドのロンドンデリーに生まれる。クイーンズ大学を22歳で卒業。1864年日本に外交官 (日本公使館通訳生) として赴任。兵庫領事・朝鮮総領事を経て日本公使館書記官となる。1889 (明治22) 年辞任帰国する。本務の余暇に日本及び朝鮮の文学・語学・歴史・宗教などの研究に従事し、語学関係では日本口語・文語両文典、日韓語比較研究をはじめ、日本文学史、『日本書紀』の英訳などがある。
- (5) 小倉 (1936), 濱田 (1966), 安田 (1966), 岸田 (1998) によれば、現在までに次のような『交隣須知』の異本の存在が確認されている。

写本:

『交隣須知』4巻, 苗代川本, 京都大学蔵, 書写期不明。(京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1966) 『交隣須知』に影印あり)。

『交隣須知』1巻 (巻4), 苗代川本, 沈寿官家蔵, 巻一書写期不明・巻三文政10 (1827) 年写と天保13 (1842) 年写しの2種, 巻四の二嘉永5 (1852) 年写。

『交隣須知』3巻 (巻2・3・4), 中村庄次郎氏書写・前問恭作模写本, 韓国ソウル大学校付属図書館圭章閣蔵, 巻1欠, 第2巻は明治元 (1868) 年書写。

『交隣須知』2巻 (巻2・3), 濟州本, 東京大学小倉文庫蔵, 明治13 (1880) 年書写。

『交隣須知』1巻 (巻3), 中村幸彦氏蔵。

『交隣須知』1巻 (巻4) 小田幾五郎修正本, 東京大学旧南葵文庫蔵。

『交隣須知』巻1 (部分), 巻2 (部分) ロシア東方学研究所蔵アストン旧蔵本。なお、岸田 (1998: 24) によると、この他にも、対馬歴史民族資料館に増補系の写本1冊が保管されているという

刊本:

『交隣須知』4巻, 外務省版, 明治14 (1881) 年, 釜山図書館蔵, 福島・岡上 (1990) に影印あり。

『再刊交隣須知』4巻, 浦瀬裕校正増補, 明治16 (1883) 年, 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1967) 『異本隣語大方・交隣須知』に影印あり。

『交隣須知』4巻, 寶迫繁勝剛正, 明治16 (1883) 年, 京

都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）『異本隣語大方・交隣須知』に影印あり。

『校訂交隣須知』前間恭作・藤波義貫共訂、明治37（1904）年、京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）『異本隣語大方・交隣須知』に影印あり。

- (6) 濱田（1966：22）は京大版『交隣須知』について、次のように記述している。「本書には、序跋ともになく、その成立、書写の事情を明らかにすることは困難であるが、紙質、筆蹟からして、少なくとも江戸時代末期以前の書写に属すべきものであることは間違いなく、恐らく、他の同類の、苗代川伝本の朝鮮語学書と相前後する。文化、文政頃より、おそくとも、天保、安政頃までの、つまり、十九世紀の前半期の書写と見て大過ないものと思われる。」
- (7) 京大版『交隣須知』の資料的価値について、濱田（1966：22）は次のように記述している。「また、明治以後の刊本では、編者の意によって本文を改められたところが多く、交隣須知本来の形を保存するものが少ないが、本写本も、勿論、すべて編纂当初そのままの本文を忠実に伝えていくと云うわけではないにしても、すくなくとも、明治版以前の、より古い姿を示す写本としては、現在知られる限り唯一の完本であり、日本語および朝鮮語の史的研究の資料としての使用に堪え得る、貴重な伝本であるべきことは、疑いを容れないところであろう。」
- (8) 雨森芳洲著・関西大学東西学術研究所「日中文化交流の史的研究」歴史班編（1982：281-309）「詞稽古之者立立記録」に『交隣須知』の書名が記されている。
- (9) 例文は全て京大版『交隣須知』からの転載である。ハングルは全て付録(1)の転写方式に従って逐字転写を行った。なお、例文の末尾に見出し漢字、その次に『交隣須知』中の項目、最後に巻数とその巻に於ける張数と左右の別（右:right, 左:left）を記した。略語については、付録(2)の略語表を参照。
- (10) 近世から現代朝鮮語において格の範疇を示す際の名詞の屈折は、名詞語幹への格語尾の膠着によって行われる。近世語では名詞は語幹屈折を行わない。名詞語幹と格語尾の接合の度合いを日本語の助詞と比べた場合、語幹末音が母音か子音によって変化する点で、大きく異なる。日本語の助詞と区別するために、助詞（particle：不変化詞）という術語は用いなかった。
- (11) より広く用いられている定義に従えば、ある言語の発話における最小の有意義的要素である（Hockett（1958）*A Course in Modern Linguistics*, New York: the Macmillan）。形態素は{ }で、形態素の異形態は//で示す。例えば、朝鮮語で「10」を意味する形態素{sip}は、異形態として/sip/と/sim/を持つ。この場合、意味を担う最小単位としての形態素は{ }で示され、形態素の音韻的な交替を実現する音素（音声ではない）が//によって示される。形態素と音素の関係は、音素と音声においても例えば朝鮮語では音素 /k/ が [g] と [k] の異形態を持つのと似ている。
- (12) 形態素・音素・語などが環境・文法的機能などによってその形を変える共時的現象。交替には意味の変化を伴うものと、伴わないものがある。意味の変化を伴わないものとしては、異形態や異音間の交替関係を言い、意味の変化を伴う交替としては、屈折や派生などに伴う形態の変容を言う。
- (13) 文字の上で「分かち書き」（word division）の慣習のあるところでは、その分かち書きによって単位が設定されているから、文字の上では語の認定は容易である。音声言語の場合は、そのような区分は、必ずしも常にできるとは限らない。正書法で「分かち書き」をすることで、その「分かち書き」によって語の単位が明確にされる。語という単位は、言語の文字化という反省の過程において要請されるものである。単位

の抽出における設定がしばしば恣意的にならざるを得ない。極端に言えば、語というものは、言語の文字化によって生まれるものかもしれない。

- (14) 前後に潜在的な休止が入りうる最小の有意義単位。主に日本語文法で用いられる術語であるが、韓国における国語文法でも文節に当たる単位を立てることがある。
- (15) segmentation: 連続体としての言語音を継起的・離散的な単位に分割すること。分節の結果得られる単位を分節素（segment）といい、音声学的な記述ではこの分節素は単音ないしは分節音に、音韻論的な記述では分節音素に相当する。形態音韻論的な記述では形態素に相当する。
- (16) 発話の中で前後を休止ではさまれたひとつつながりの部分。休止は、息継ぎ、言い誤り、考えながら話す場合の他、文の構造を聞き手にわかりやすくするために句や節の境界など適当なところにおかれるのが普通である（亀井・河野・千野1996：546）。
- (17) gaz@r「秋」、g@nwr「陰」、g@'wr「州」、gar「刀」、go「鼻」、gwrw「株」、gin「授」、n@r「刃」、n@r「經」、nara「国」、najo「夕」、nai「川」、nei「四」、no「繩」、nima「額」、nimja「主」、d@r「月」、d@r「等」、sda「地」、dor「石」、dur「二」、dui「後」、dwrw「野」、bdwr「庭」、m@z@r「里」、mar「掘」、m@i「野」、mo「隅」、moi「山」、mir「麦」、b@r「臂」、bo「梁」、s@r「肉」、sei「三」、so「潭」、su「雄」、swmur「二十」、'an「内」、'am「雌」、'yer「十」、'u「上」、'ur「雞」、'um「穴」、'ui'an「園」、ja「尺」、ja「第」、jo「粟」、c@r「源」、te「基」、han@r「天」、h@na「一」
- (18) nara「国」、sda「地」、han@r「天」、gir「道」、nai「川」、sinai「溪」、g@z@r「秋」、najo「夕」、'u「上」、dui「後」、'an「内」、moi「山」、m@i「野」、dwrw「野」、dor「梁」、cr@「源」、sdr@「源」、m@z@r「村」、bdwr「庭」、su「藪」、'um「窟」、k@h@r「陰」、mo「角」、g@or「州」、syeur「京」、'yere「諸々の」、ma「薯」、n@m@r「菜」、mir「小麦」、jo「粟」、'ar「卵」、go「鼻」、nima「額」、b@r「臂」、s@r「肌」、'am「雌」、su「雄」、dye「笛」、n@r「刃」、経/タタイト、mar「クイ木+厥」、syo「俗人」、gin「纓」、no「繩」等。
- (19) (1)固有語：go「鼻」、gwrw「株」、na「歳」、nara「國」、najo /naji「夕」、nai「川」、ne「汝」、nei「四」、nima「額」、nimja「主」、sda「地」、dye「笛」、dui「後」、dwrw「野」、dwrw「簾」、ma「薯」、ma「森/ながあめ」、m@i「野」、mo「隅」、moi「山」、moi「局」、ba「素」、bada「海」、baQha「春」、byerw「崖」、bo「梁」、sei「三」、so「範」、syo「俗人」、su「雄」、sinai「溪」、'yere「諸」、'u「上」、'i「此」、ja「尺」、jo「粟」、cyo「酢」、te「基」、h@na「一」、gar「刀」、gar「枷」、g@n@r「陰」、g@z@r「秋」、g@'or「州」、gyezwr「冬」、gir「路」、n@m@r「菜」、n@r「刃」、d@r「月」、d@r「等」、sd@r「源」、dor「石」、dor「梁」、dur「二」、dwr「野」、bdwr「庭」、s@r「肌」、syeb@r「京」、swg@b@r「郷」、swgur「郷」、swmwr「二十」、'a@r「卵」、'yer「十」、'yer「麻」、'or「今年」、'ur「箱」、c@t「源」、han@r「天」、gin「授」、dui'an「園」、'an「内」、'en「堤」、'ui'an「園」、'am「雌」、'um「寶」、ged「表」、gyed「側」、gwd「末」、dod「豚」、mid「底」、bad「田」、sod「鼎」、nib「葉」、dib「稿」、bub「鼓」、seb「薪」、'arb「前」、'ib「戸」、nyeg「方」、gaj「皮」
- (2)漢字語：go「庫」、no「體」、bo「極裸」、syaQ「常」、so「沼」、su「藪」、'yo「褥」
- (20) (上/方位/Vol1/16right)、(山葡/果實/Vol2/31right)、(水風爐/鋪陳/Vol. 3. 9left)、(重々/逍遙/Vol. 4/51right)
- (21) 中央に火筒がついた卓上こんろ。またはそのこんろで作った料理名

付録(1) ハングルの転写について

本稿では、ハングルのためにローマ字による転写を行った。無気音と有気音の行われてきた由来に基づくのであれば、本来はㄱ: k, ㅋ: k+h → kh とするべきであるが、h音との混同を避けるために、無気音にはアルファベットの有声音を、有気音には有声音に対応する無声音を用いてㄱ: g, ㅋ: kのように処理した。以下、転写文字はそれぞれ次のようになる。

(子音)

	平音	激音	濃音	鼻音	流音
唇音	ㅂ: b	ㅃ: p	ㅃ: bb	ㅁ: m	ㄹ: r
舌先音	ㄷ: d	ㅌ: t	ㅌ: dd	ㄴ: n	
	ㅈ: j	ㅉ: c	ㅉ: jj		
		ㅅ: s	ㅆ: ss		
軟口蓋音	ㄱ: g	ㅋ: k	ㄲ: gg	ㅇ: (語末ではQ[ng])	
声門音	ㅇ: (語頭では')	ㅎ: h			

(母音) 中世語の母音体系の特徴として、母音調和がある。i を中立母音として、母音が陽母音と陰母音と同じ単語内では1つの系列の母音しか共存できなかった。

中立母音	ㅣ: i		
陽母音	ㅏ: @	ㅑ: a	ㅓ: o
陰母音	ㅓ: e	ㅕ: u	ㅗ: w
二重母音	ㅑ: ya	ㅓ: ye	ㅓ: yai
	ㅓ: yei	ㅓ: yo	ㅓ: yu
	ㅓ: ai	ㅓ: ei	ㅓ: oa
	ㅓ: oi	ㅓ: ue	ㅓ: ui
	ㅓ: wi	ㅓ: uei	ㅓ: oai

付録(2) 略語一覧

ABS	絶対格	absolutive (無標)
TOP	提題	topical
NOM	主格	nominative
GEN	属格	genitive
ACC	対格	accusative

DAT	与格	dative
ABL	奪格	ablative
COM	共格	comitative
LOC	処格	locative
INST	具格	instrumental
NEG	否定	negation
PL	複数	plural
人称代名詞		
1sg	1人称単数	
1pl	1人称複数	
2sg	2人称単数	
2pl	2人称複数	
3sg	3人称単数	
3pl	3人称複数	
INDF	不定人称	indefinite person
語尾		
CONJ	接続語尾	conjunctive
DEC	陳述	declarative
END	終結語尾	ending
FURT	未来・推量	future
GRND	名詞形語尾	gerund
HONR	尊敬接辞	honorific
IMP	命令	imperative
INTR	疑問	interrogative
PAST	過去	past
PTCP	連体形語尾	participle
		後続の体言を修飾させる語尾
QUOT	引用形語尾	quotation 引用文を形成する語尾
待遇法の語尾		
HF	上称	high formal style
LF	中称	low formal style
HP	等称	high plain style
LP	下称	low plain style